

まえがき 職業選択の自由を再考する

私は小さい頃から就職するつもりがなかった。なぜならば、父親が中小企業の社長だったからだ。そもそも会社員として働く、ということがどういうことなのかもわからなかった。電車で通勤する、という姿も見たことがなかった。私にとって社会に出て仕事をするということは、就職するということではなかった。自分で会社を経営する、ということだった。小学校の卒業文集には、『自分の会社を建てる』と書いていた。

中学生だった私は早く経営を学びたかった。しかし、わからなかった。どうすれば経営者になれるのか。学校の授業は何の役にも立たなかった。知識を覚えるだけで、その知識を使って何をすればいいのかはわからなかった。そのまま高校に進学し、大学に進学した。なぜ進学するのはわからなかった。多くの人が就職のため、大学に行っていた。しかし私は就職するつもりはなかった。そして就職活動の時期を迎えた。就職するためには働かしくない。経営者になるための道筋の一つとして、公認会計士試験を受けると決意した。専門学校に通い、講師をやり、公認会計士試験に合格した。その後、監査法人に勤め、経営コンサルティング会社に移った。この間、十五年。結局、私は就職したのだ。私はいつの間にか会社員になっていた。そしてそこに苦痛を感じ、会社を辞めた。

会社員になるということは、就職するということである。就職は、職業選択ではない。どこで働くかを決めることと、何を仕事にするかは全く違う。そしてさらに、何を仕事にするかを決めたら、次に大切になるのは、どのように働くか、である。どこで働くかは二の次、三の次なのである。

「あなたは、何を仕事にしますか？」

「どのように働きますか？」

「そのために、どこで働きますか？」

就職先を選ぶ前に決めるべきことがある。それは職業である。そこから導かれる働き方である。職業選択は、就職するか否か以前の問題である。職業選択の結果如何では、就職するよりも、アルバイトをしたり、起業したりする方がいいかもしれない。場合によっては、無給のボランティアすら候補になるかもしれない。どこで働くかは二の次、三の次である。もしあなたがすでにどこかの会社に勤めていて、「このままこの会社においていいのだろうか？」と悩んでいるとしたら、ぜひ本書を読んでみてほしい。

「何を仕事にするのか？」「どのように働くのか？」をしっかりと見つけ直してみれば、「どこで働くのか？」の答えは自ずと明らかになる。

答えが、いまの会社で働く、であれば、いまの会社に居つづけければいい。

答えが、別の場所で働く、であれば、いまいる場所は間違っている。安心して新しい道に進めばいい。

最悪なのは、迷いつづけることだ。ここにいる、と決めず、新しいところに行く、とも決めない。それは立ち止まること。

立ち止まっている限り、何も生まれない。自分の人生を無駄にするだけだ。

「何を仕事にするのか？」

「どのように働くのか？」

ぜひ、改めて考えてみてほしい。得るものは大きい。失うものは少ない。やってみることだ。

職業選択の自由を再考する。これが本書の目的である。